

(続紙 1)

京都大学	博士 (経営科学)	氏名	井登 友一
論文題目	「意味のイノベーション」の発展的批判と実践可能性拡大のための理論的再解釈		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、イノベーション研究において従来のイノベーション概念に対する新たな視座を提唱する「意味のイノベーション」を主題とし、当該概念に内在する理論的観点での矛盾および実践にあたっての課題を乗り越えるべく他の理論的枠組み、および理論的視座を援用することでイノベーション実践理論としての完成と発展を企図する研究をまとめたものとなる。</p> <p>第1章において、従来の技術主導型イノベーションおよび市場牽引型イノベーションによる新たな価値創造に関する閉塞感を打開する第三の道としてロベルト・ベルガンティ (Roberto Verganti) によって提唱された「意味のイノベーション (以下: IoM)」について、イノベーション研究において従来革新対象として扱われてこなかった「意味」に着目する概念的な新奇性と独創性を評価したうえで、ベルガンティが掲げるIoMの二大原則である「内から外へのイノベーション」および「批判精神」について実践者が適切に理解し、実践するための手がかりとなる理論的説明をベルガンティ自身が十分に為していない点を批判し、両原則が抱える矛盾と問題を他の理論的枠組みを用いて考察し説明できる状態にすることで、IoMをイノベーション実践理論として理論的に補完し完成しうる可能性を提示した。</p> <p>第2章では、IoMの第一原則が抱える矛盾について、ベルガンティが当初は最も重要な概念としていた「デザイン・ディスコース」に注目し、その意味を先行研究のレビューを通して読み解くことで、IoMの主体となる「自分自身 (ひとり)」とは、周囲の関係性から分断され孤立した「主体としての個人」ではなく、デザイン・ディスコースという多様なアクターから構成される複雑な関係性ネットワークを構成する一員として存在する個人が、関係性の中で一時的な局面において主体としての役割を「与えられる」存在であることを示した。そして、IoMにおいて重要となるのは個人の超越的な資質やビジョン以上に高質なデザイン・ディスコースの形成にあるという考え方をあぶり出すことで、理論的な説明が補完されることを示した。</p> <p>第3章では、この理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確認すると共に、従来属人的と考えられがちなイノベーション (新規事業創出) における主体性は個人に閉じたものではなく、関係性ネットワークにおける集団的な言表行為によって生成され主体化されるものであるという構造をフランスの哲学者であるジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) と、同じくフランスの精神分析家であるフェリックス・ガタリ (Félix Guattari) によるアジャンスマン概念を用いることで導出した。</p> <p>続く第4章では、IoMの第二原則として掲げられている「批判精神」の真意について、ベルガンティが抽象的かつ一般的な説明に留めてしまっていることが実践者にとって適切な概念理解を困難にさせ、実践の障壁となっている点を指摘し、フランスの政治哲学者ジャック・ランシエール (Jacques Rancière) の批判概念を用いることで改めて理論的に説明することを試みた。結論として、ランシエールの批判概念を視座としてIoMの批判精神を読み解くことで、ベルガンティが本来提唱しようとした批判概念の真意とは、あらゆる二元論を中断 (宙吊り) し、安易な二項対立的枠組みから距離をとることで既存の意味体制を解体する行為であり、より良い新たな意味体制を再配置することによる既存価値を解体した新たな価値創出を企図するための営みであることが説明できた。</p> <p>第5章においては第4章において行った理論的説明の妥当性について企業事例の考察を通して確かめたうえで、最終章となる第6章において本論文全体の論考の整理と結</p>			

論の提示を行った。

本研究が行った「意味のイノベーション」の理論的完成および再解釈は、企業や組織においてイノベーション実践を志向する多くの実践者が新価値創出活動に挑む際の理論的枠組みの提供と実践着手を促す緒を成すことに貢献する示唆を提示するものである。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し、審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ベルガンティが提唱する「意味のイノベーション」の理論的課題を明確にし、それを乗り越える視座を提示し、経験的研究を通してその視座の有効性および実践的含意を議論するものである。まず、意味のイノベーションは、2000年代中頃から始まるデザイン思考の限界を乗り越えるために構想されてきた。デザイン思考は、デザイン主体の内面からではなく、現場で洞察を得るという外からの発想を強調し、そしてステークホルダーの様々な視点から発想を広げるために批判を排除し共創を重視した。意味のイノベーションでは、この二点を逆転する形で構想されている。

意味のイノベーションは、一人の個人の内から発想する「内から外」への展開を提案しているが、そもそもデザイン思考がエリート的デザイナーの天才に還元することを批判し、外から内への思考を提案したことを考えると、この批判以前に逆戻りすることを意味しかねない。これは主体概念の理論的な位置付けを棚に上げた議論になっているからであり、本論文はこの点をディスコースそしてアジャンスマンの概念に依拠した乗り越えを目指すものである。

さらに意味のイノベーションは批判概念を再導入するが、これもデザイン思考がデザイナーによる英雄的行為ではなく、利用者を含めた様々なステークホルダーが創造的に共創することを想定したために必要となった概念であると考え、安易に批判を再導入することは議論の逆戻りになってしまう。本論文は、ベルガンティが批判は否定ではないという主旨に触れていることを考え、ランシエールの芸術のエステティック(美学=感性論的)体制の概念を用いることで、批判を精緻に位置付けることを目指す。この2点の課題を理論的に位置付けた上で、経験的な事例分析を実施した。

本論文が理論的な課題を特定しそれを乗り越える視座を提案し、事例分析で例証することで既存の理論を更新していることは、博士論文の要件を十分に満たすものとして評価できる。

一方で、いくつかの課題を指摘できる。まず、各所で個別の理論を利用しているが、それらの関係は必ずしも明確にされていない。例えば、ベルガンティが依拠し後に手放したディスコース概念を発展させるためにフーコーの理論に依拠しているが、経験的分析においては突如ドゥルーズ&ガタリのアジャンスマン概念に移行している。また批判概念に関してはランシエールの理論へ移行しているが、その関係性は明示的に議論されていない。これらの関係を明確にすることで、本論文の主張が一貫するだけではなく、個々の議論もより深められると期待できる。例えば、創造的主体性を捉えるためにはディスコース概念自体に限界があり、アジャンスマン概念がそれを乗り越えることを念頭に議論されてきた背景がある。したがって、ベルガンティがディスコース概念を手放したのは、本論文が主張するようにグローバルで文脈に依存しない実践に議論を展開する必要性があったという実践的理由以上に、ベルガンティ自身が理論的な袋小路に陥っていたとも言え、それを乗り越えようとする本論文の価値がより高まる可能性が高い。

次に、第一の事例が企業外の市場に向けた新規事業開発という、意味のイノベーションの典型的な事例である一方で、第二の事例が企業の内部の経営の事例であるという齟齬、つまり都合のよい事例を用いているのではないかという批判が向けられる。ここでもさらに踏み込んで検討することで、本論文の主張自体をより深めることができる。例えば第二事例が、そもそも新規事業の立ち上げのために特別なプロセスや役割を設定せず、むしろ既存の感性的秩序を常に中断する実践を示しているなら、組織内部の経営と外部に向けた新規事業という二分法自体を乗り越えるこ

とを構想することも可能である。また、経営における持続可能性などの議論と節合するのであれば、ランシエールがカントやシラーの構想を引き継ぎ、エステティックスを倫理(エシックス)や政治と架橋しようとしたことに立ち戻り、さらに積極的に新規事業、倫理、政治をより深く関連づけ、逆にこれを新規事業開発の議論に持ち込むことも意義のある含意となる可能性がある。

最後に、意味と価値の二つの用語が使われているが、それらの関係が曖昧であることも指摘できる。同義で使われている部分もあれば、分けられている部分もある。これはベルガンティ自身が意味の概念を十分に検討できていないことにも起因するため、さらに本論文の貢献が期待できるテーマであるとも言える。特に、価値創造をニーズの充足や問題解決などから、ディスコース概念に依拠して意味論へ移行させたことの意味を丁寧に整理することが必要である。ディスコースへの着目は元来、新しい意味を提示することで価値を生み出すというだけではなく、意味自体が不確実であること、意味は排除された無意味の核に依存していること、そして意味が結びつく諸価値の価値の背景には力への意志があることが含意されていたはずである。特に、ドゥルーズ&ガタリやランシエールに依拠するのであれば、意味を攪乱する実践、どもりや外国語、正しい意見として聞かれえない声など、意味を逃れる無意味を積極的に捉えることで、意味論を乗り越える視座を議論できる可能性がある。

ただしこれらの諸問題は、博士論文としての評価を著しく低下させるものではない。むしろ、これまで曖昧に議論されてきた意味のイノベーションを理論的基礎から検討した結果として、初めて議論が可能になっているものでもあり、本論文の意義をより補強するものとも言える。以上を検討し、本論文は博士(経営科学)の学位論文として価値あるものと認める。また、2023年1月23日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。

注) 論文審査の結果の要旨の結句には、学位論文の審査についての認定を明記すること。

更に、試問の結果の要旨(例えば「平成 年 月 日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。」)を付け加えること。